

1920年代からは、ピアノのアルフレッド・コルトー、ヴァイオリンのジャック・ティボーと組んだ、空前の音楽性を湛えた三重奏団「カザルス・トリオ」の主軸としても活動した。

しかも彼は、そのかたわらバルセロナに8名の団員を擁する「パウ・カザルス管弦楽団」を組織して自ら指揮棒をとったのである。指揮はチェロと共にカザルスの終生にわたつての仕事となつた。

36年のこと、彼の国スペインで、不幸な事態が起こる。ファシスト的な右翼がクーデターを企て、程なくスペインを掌握するに至つたのである。かねがねバルセロナに「勤労者音楽協会」を設立するなど民主的思想の持ち主だったカザルスは、時の共和政府を暴力でくつがえした上、強圧的独裁政権として君臨したフランコ總統とその右翼勢力に、断じて妥協しなかつた。

南フランスのブレードに亡命者として生きながら、彼は抗議のため、フランコ政権を容認する国々——それは意外にも大多数を占めた——での公的な演奏活動をいつさい拒否した。とりわけカザルスには、スペイン国内でも特別な言語と独自の文化を持つカタルーニヤの出身者として、この地方がフランコの中央集権化のもとで、こ

## 偉大なる恩師を語る

チェリスト  
平井丈一朗

証

言



カザルスに初めてレッスンを受けた時のことです。遠く日本から来た私を笑顔で迎えてくれた彼は、私が何曲か演奏すると、立ち上がって「ブラボー！君は非常に才能のある人だ」と言ってくれました。そして「私のもとで音楽と芸術を学ぶんだ」と。

カザルスの音は、言うなれば「魂の声」でした。澄みきっていて温かい音な

のですが、その奥に決して崩れない精神——自分の掟がありました。そこに私は本物の音楽の原点を見た思いがしました。

カザルス音楽祭には、世界中からトップクラスの演奏家が訪れていました。オイストラフ、ゼルキン、スターン……。そういった人たちが、カザルスの前に出るとまるで子どものようなのです。彼が内包するものがあまりにも大きくて、太刀打ちできないといった様子でした。

クラシック音楽の大家と呼ばれる人たちは、みな西洋的な感性の持ち主です。でもカザルスは、東洋的なものまで持ち合わせていました。それは日本のわび・さびにも通じるものだと思います。民族、国境をすべて超越していました。さらに言えば、彼は宇宙的な人間でした。そして彼の芸術は、宇宙の法則、秩序そのものです。彼の音楽はもちろん、人格や品位の高さが、私たちを絶えず惹きつけているのです。

クラシック音楽の歴史の中で、このような人はいませんでしたし、これからも出てくるとは、どうしても思えないのです。

とごとに自由を奪われ束縛されていく現実が許せなかつた。

ちなみにカザルスは、標準スペイン語式に「パブロ」と呼ばれることを好まず、カタルーニヤ語による呼称「パウ」のほうを用いてくれるようにと、いつも願っていた。あまつさえ、「パウ」には、カタルーニヤ語で「平和」の意味があるのだった。

彼は後年、自分の演奏のアンコールには決まってカタルーニヤのクリスマス・

キャロルである「鳥の歌」を奏で、「私の故郷では、鳥もピース、ピースとさえずって飛ぶのです」とコメントしたが、亡命してのち30数年、ついに故国へ戻る日を持てなかつた。カザルスの後半生は、一貫して民主主義と平和の理想（具体的には国連の平和および人道的活動への支援、核廃絶の呼びかけなど）に捧げられた。

したがって、掛け替えない芸術家であると同時に高い理想を掲げる人



1972年、ブエルトリコのカザルス邸で歓談する平井とカザルス。カザルスは平井を「自分の後継者」と公言していた